

さ く 建 て て 大 き く 暮 ら す

海の向こうのアメリカでも「タイニーハウス」の動きあり。
ニューヨーク・タイムズが先頃報じた、アメリカ流狭小住宅には
サイコロハウスからハリケーン・カトリーナの被災者用住宅まである。
家選びは車選びとちっとも変わらないと語る人もいる。
小さく建てる家はチャレンジだという点だけは国が違っても共通している。

文・ベサニー・リトル Text: Bethany Little
写真・ピーター・ダシルバ Photo: Peter DaSilva for The NYT
訳・河村喜代子 Translation: Kiyoko Kawamura





モダンカーバーナのプランは床面積の広さに応じて3m×3m、3m×3.5m、3m×4.2m、3m×4.5mの4通りがある。この面積は否定のしようがないほど狭い。けれど家としての選択的に、狭小住宅を入れている人たちは、このスペースを狭いままでは終わらせない。魅力的なデザインの狭小住宅を提案してくれるメーカーがいる一方で、環境に負荷をかけずに暮らすという考えがアメリカの狭小住宅にはある。それは家が狭いことへのチャレンジというよりも、自分の生き方に対して、自分自身が投げかけたチャレンジになっている。

どんな家を選ぶか。それは車選びと変わらない。もともとカトリック被災者向けに設計された「テージ」だって狭小住宅の選択肢のひとつになっている。

小さなボーチ付きのバス、カスターのコンパクトな家である。その200坪のカトリック・テージという家は、もともとはキネザート・テージ社がハリケーン被災者のために設計したものである。「この家を見た時、ちょうど1994年代によくあったバンガローみたいだねと思ったわ」とコンティ夫人は語る。

イントラコスタル・ウオーターウェイに面して900坪の家を持つコンティ夫妻は、家のドアを開ければすぐに船を出せる場所に住んでおり、パケーション用のセカンダリハウスに用はなかった。その代わりに娘夫婦と幼い孫が住んでいるワシントンに近いヴァージニアカメリランドのどこかに土地を買って、カトリック被災者用のテージをここに建てようと考えている。「そこらあたりからだ娘たちが住むところまではんの数時間で行けるし、なにより泊まらずに帰ってこられるのが娘たちの生活を容易することも多いし、お金もかからないでしょ。」

狭小住宅にかかる費用は、建てる場所によって違うが、一般には、家の外装のグレードとどこに建築を頼

天井までの高さが1mというスリールビングフロアだ。そこに上がって夜の空に広がる星を眺めながら眠りに就く。「シンプルでビュアなシエラターそのものだわ」とはシエバードである。

今、小さい家の波が来ている。シエバードたちの小さな家のように、ひとつは仮住まいの家としてである。またそれとは違い、もっと永続的に暮らすための家の場合でも、意図して省スペースを選択した家に注目が集まっている。こうした動きに、デザイナーたちは素直な反応を示して

小屋は20坪弱と居住スペースは限られている。料理をしたりくつろぐのはタタと広がる戸外でやることにした。景色を眺める代わりに、景色の中で暮らす。

ある。住宅メーカーも設計プランや狭小住宅用のキットからプレハブ方式の家まで、セカンドハウスとして狭小を考えている人たちが向けに売り出しをかけている。そのほとんどが150坪足らずといった家ばかりで、これはスペースに関しては広がり放題だったこれまでのセカンドハウスとは好対照を示している。

こうした狭小という考え方を、多くの人が合理的だと考えるようになってきた。セカンドハウスを、アウトドアを楽しむための拠点にしている人は多い。つまり、一年のうち

の人は多い。つまり、一年のうち

節約できる。プレハブにしてもプレビルト方式の家でも、整地作業は必要ないか、あってもさほど手間ではない。なので、週末ごとに車で通ってきては、家を建てる前の下作業をする必要はない。こうした家のいいところはまたある。設計の段階が終わってしまえば、数日で家はできてしまう。なかにはほんの数時間しかかからない家だってあり、たいしては家を運びこんで据えつけて、建を閉ければもう住める。

おじさんがトンテンやつてつくったハンティング用の小屋とさして違わないと思える家が、このところ急激に人気を集めている。たいしては航空機に備え付けられているほどのバスルームと、簡便なキッチンがついている。家のスタイルにはいろいろあって、ロマンティック風だったり田舎風やら、デザイナーズ風のモダンなものまである。サンタモニカにあるサザビーズ・インターナショナル不動産社のジャネット・アンダーセンはこうした流れが、人の手が入っていない土地の販売を押し上げているという。「家のデザインさえ気に入れば、すぐにでも買いたいという客はいくつもあります。そうした人たちは、土地の購入代金として貯めておいた資金を使うのに躊躇がありません」と話す。

にステイタスを期待するのではなく、生き方にあった家に住めることがステイタスなのだ。

2004年に9万ドルで210坪のアルケミーアーキテクト社のウィーハウスを買ったのは、スコット・マックグラフソン夫妻である。40歳のマックグラフソンは、ミネアポリスでウッドスプーツ社というカスタム家具のスタジオを経営し、妻のリサは人材コーディネーターをしている。夫妻が購入したウィーハウスに

オーケランドに住むジョン・フリードマンとクリスティン・シエバードが購入したのは、20万坪もあるうかという広大な土地。場所はコロラド州のテルエライドに近い山の上、ゆくゆくは家を建てるつもりだが、すぐにというわけではない。まずよく土地のことを知ってから、環境になじむ家を建てるつもりでいる。どの場所にも家を建てたらいいのか、最適な場所を見極めなくてはと考えている。そのため一、二年間は、幾度も足を運ぶつもりでいるが、なにしるその場所というのが2880m

ウィーハウスはいわば積み木の家。 家族構成や暮らしのスタイルに合わせて、ブロック状の ユニットを組み重ねたり連結させたり自由自在。

ケアのキャビネットが付いている。居心地がよく感じのいい家である。「でもねブレハブの家と聞くと、みんな安宿かと思うみたいだね」とは妻のリサである。「ミドルクラスの予算をかけたからできたけど、決して安上がりではなかったわ。」ふたりはすでに土地を買ってあった。北ミネソタにあるビーキーワン湖のほとりにある小さな土地で、2002年に8万ドルした。パクテリアを利用する浄化槽と井戸があり、電気は利用可能になっていた。

長方形のモジュールをメインフロアにして、その上に真四角のモジュールを載せて、これがセカンドベッドルームになっている。ただしここに上がるためには、外に取りつけてあるハシゴを上らなければならぬ。家に来た客に、この部屋は好評である。母屋とは切り離されて独立した格好になっているからだ。「うちの3人の子たちをロフトアウトすることもできますからね。」

「ここでどうしてもちょっと、計算をしてみたくなる。5人家族で210坪の広さの家を暮らすことになる。これはかなりの挑戦である。しかもうち3人はまだ成長期にある子どもたちだ。スペースを有効活用するために、マックグラフソンが彼自らはとんどの家具のデザインと製作にあ

たり、そのうちのいくつかは家の周囲の森に生えている白樺の木を使った。それに別棟としてサウナを建て、戸外用のデッキもつけた。「それでも友人たちがやってくると、かなり窮屈ですよ。」でもその代わりに、ここを出る時が来たら、簡単に引き払える。「そうだった時にはここに泳ぎに来たり、釣りやハイキングをしに来ますよ」とマックグラフソンは言う。「家が持つている便利なのが、ここにはすべて揃っていますからね。」

狭小住宅に住むといっても、テクノロジーが発達しているお陰で不便を感じることはない。狭小住宅協会の会長をしているグレゴリー・ジョンソンは、アイオワで20坪の家に住んでいるが、以前だったら「ステレオセットに大量のLPやCDに写真のアルバムとちよつとした蔵書を置く場所がなければ困ったものだ」という。それが今ではラフトトップのパソコンがiPodがあれば事足

りてしまう時代だ。ミネソタのオーケストラでパイオリン奏者をしているステファニー・アラードは、狭小住宅に住んでみて

自分が暮らしていくうえで、どれほどのわずかな場所があればいいのかがあったと語る。彼女は4万5000ドルほどで117坪になるウィーハウスを電気なし、バスルームなしの状態で購入した。それというのも、アラードはウイスコンシン湖の西に4万坪の土地を所有していたが、その敷地に問題があったため、仮住まいとしての住まいが必要だったからだ。アラードにはふたりの子どもがおり、彼女はこの小さな家を足がかりとして住み、ゆくゆくはもっと大きな家を建てるつもりでいた。

けれどそこに4年間住んでみた今となっては、家を大きくするつもりはなくなくなったという。「暮らしてみても気づいたのです。なんてうまく考えられているかということに。」クインサイズのベッドに彼女が寝て、ふたりの子どもたちには寝たなごがある。友人たちが遊びに来たときには、スリーピングパッドと簡易ベッドを引き出せばいい。「壁にガラスがはまっているので、実際より広く感じると、幅がたったの4・2mしかないと言つと、みんなびっくりするんですよ。」

モダンカバーナはデザイン指向の強い都会派狭小住宅だ。 スタイルを重視すると同時に、環境にあたる負荷や インパクトに配慮する意識が狭小住宅人気のバックにある。

狭小住宅への関心の高まりと、休暇で過ごす家のあり方に起きている変化は表裏一体のものだ。そこでは自然環境の保護が、見逃せないもの

になっている。冒頭に紹介したジョン・フリードマンとクリスティン・シエバードは、この春、コロラド州のテルエライドに置いてあるタンブルウイード・タイニーハウスに行くつもりでいるが、それはただ山を歩き回るの目的ではなく、周囲の自然の植生に変化が生じていないかを観察するためであり、環境の保全を計ることが第一の目的にある。環境の保護とあるがまさに保全すること、それこそがふたりが土地を購入する際に真っ先に考えたことだったからだ。

サンフランシスコで弁護士をしているマシュー・アダムズ30歳は、こうした流れを支持している。2月2日、彼はカリフォルニアのレッドラップの近郊に持っている20万坪という広大な地に立つていた。そこに2万4000ドルで購入したわずか36坪ほどにしかない家のモダンな壁が、立ち上がったのを見守っていた。アダムズは自分が守るべきと考える環境アジェンダを決めており、かつて牧場だったその土地を守っていく執事役を、自分で自分に課したのだという。「正直な気持ちで言えば、できればデザイン的にもイケテル家にしたかったですね。」

モダンカバーナはその両方を兼ね備えている。この家はコンクリート柱の上に構造体を据えるので、基礎打ちをする必要がない。廃棄物を最小限に抑えるために、モダンカバーナを施工する会社のニック・ダムナ

1によれば、使用するのはすべて2・4mのユニット規格になった合板とガラスと壁板のみだという。断熱材にはリサイクルデュラムを使用する。

このガラスと木材を使ったモダンカバーナについて、アダムズは「狭小住宅は大きな家よりも、守られているというシニエルター感覚をより実感できる」と語る。大地の上にとっ

と置かれた宝石箱のようでもある。「家の中にいて外に広がる自然を見ていると、自分が箱の中に包まれていく感覚を強く意識するんだ。」いくつかあるデザインオプションの中から、アダムズは家の四面に開閉できる窓を付け、スライド式のガラスドアを選んだ。「ここにはキルトさえないし、細々とした道具類はいっぱい置かないつもりなんだ。」確かにキッチンもなければ、バスルームもない。アダムズの計画では井戸を掘るつもりではあるという。そうしたらもうひとつカバーナを購入して、そちらをバスルーム専用にするというわけだから、料理はこの先もずっとアウトドア、家の外でやるつもりでいることになる。



クリートのブロックを四隅に配置するだけなので、大がかりな基礎工事は不要。その上に防腐処理した横木を渡す。これが床を支える部位になるので、水準器を使ってしっかりと水平を取って組立て済みのプラットフォームを置く。ここでも再度、水平を確認してから床板をはる。窓を取りつけてある奥の壁を立ち上げる。左右の壁を取りつければ、仮支えをしておく。下段はめこみ込みの左右の壁を立ち上げる。屋根を載せる。この屋根の水切り配は、あらかじめ取られている。正面入口のVパネルは、ドアのスタイルによって複数のパターンが用意されている。誰でも何人かの手があれば建てられる。Modern Cabana, 602 Minnesota St., San Francisco CA 94107, USA, Phone +1 415-206-9330, <http://www.moderncabana.com/>

アメリカの狭小住宅 [カバーナハウス]

小さく 建てて 大きく 暮らす。